

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380425

研究課題名(和文) 西陣・桐生・福井における近代技術定着過程と制度革新 - 比較産地発展史構築を目指して

研究課題名(英文) The process of diffusion and establishment of modern technologies and innovation in Nishijin, Kiryu, and Fukui: The introduction of comparative developmental history of industrial districts

研究代表者

橋野 知子 (Hashino, Tomoko)

神戸大学・経済学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30305411

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本経済史の分野における「比較産地発展史」の構築を目指し、西陣・桐生・福井における産地の発展を個々に詳細に分析すると同時に、新技術の導入と制度革新という観点から産地の共通点や相違点を明らかにした。さらに本研究は、産業集積研究が活発な開発経済学の分野と日本経済史研究との融合も試みた。その結果、東西の歴史的産地ならびに現代の途上国の産業集積において、共通した制度や仕組みが重要であったことが示された。具体的には、マーシャルの言う集積の外部経済を超えて、新技術の導入を支えた同業者組織の機能や地方政府のサポートという制度が、産地・産業集積の発展に普遍的に重要であったことが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to promote the establishment of comparative developmental history of industrial districts. In this research, not only developmental process of Nishijin, Kiryu, and Fukui was analyzed in detail but also the differences and similarities among them was explored by focusing on the introduction of new technologies and institutional innovation. Besides, this research attempted to synthesize between economic history and development economics, which many researches on industrial districts has been accumulated. As a result, it was indicated that similar institutions and organizations were important for the development of industrial districts in both developed countries and contemporary developing countries. This research also suggested that institutions such as trade associations and local governments universally played a critical role in introduction of new technologies and quality improvement for the development beyond Marshallian agglomeration economies.

研究分野：日本経済史・経済発展論

キーワード：経済史 経済発展 比較産地発展史 制度 技術導入 産地 産業集積

1. 研究開始当初の背景

繊維産業や織物産地に関する研究は、内外を問わず経済史・地域史研究の中で研究蓄積の厚い分野の一つであり、阿部武司氏や谷本雅之氏による一連の研究は、日本の産地研究の現在の水準を示すものである。研究代表者は、産業集積の発展こそが一国の初期段階における経済発展にとって決定的に重要であるという視点にもとづき、近現代日本の織物業の産業集積の発展メカニズムを重視した研究を続けてきた(橋野知子『経済発展と産地・市場・制度』、ミネルヴァ書房、2007年)。具体的には、織物業全体の動向をマクロ的に位置づけ、対照的な絹織物産地であった桐生と福井を比較しながら、研究代表者は生産組織と技術との関係、産業集積と国内外の市場をつなぐ情報のインフラストラクチャの構築・整備、人材育成に焦点を当ててきた。その過程で特に重要と思われたのは、工業化の初期時点で地域の人々が人材育成の重要性を自ら認識し、公的教育機関の整備に先だって、同業組合による講習会・講習所や工業学校等、トレーニングや座学の間を設立した点(Hashino 2012 “Institutionalising Technical Education”, *Australian Economic History Review* 52(1)) ならびに日本の産地はマーシャルが考えた産地よりもはるかに組織化されていた点である(Hashino and Kurosawa 2013 “Beyond Marshallian Agglomeration Economies”, *Business History Review*, 87 (3))。同時に、桐生・福井が絹織物産地として発展する上で大きな影響を与えてきた西陣に関する研究を比較史的に進める必要性も痛感していた。

一方、西欧の経済史学界では、ポメラントによる *The Great Divergence* (Princeton U.P., 2000) が「大分岐論争」を巻き起こして以来、アジア経済史に対する関心の高まりから、*Australian Economic History Review* (vol.44, 2004), *Explorations in Economic History* (vol.47, 2010), *Economic History Review* (vol.64, 2011) 等でアジア経済史の特集号が刊行されている。これらは、これまでの西洋中心史観にもとづく経済史に対する反省から、グローバル経済史の構築に向けての大きな動きと捉えられる。日本では深尾京司氏等が1930年代の日・中・韓・米の製造業の労働生産性の国際比較共同研究を *Explorations in Economic History* の特集号に寄稿している。研究代表者は *Australian Economic History Review* の上記特集号で、日本における在来産業・産地研究の進展とその国際発信の重要性について論じ(Hashino and Saito 2004 “Tradition and Interaction”, *Australian Economic History Review* 44 (3))、グローバル経済史における日本の産地レベルの実証研究の位置づけを試み始めていた(Hashino and Otsuka 2013 “Hand Looms, Power Looms, and Changing Production Organizations”, *Economic History Review* 66 (3))。近年における個々の産地研究の進展に

より、経済史的に重要な知見は着実に蓄積されているものの、産地間比較や国際比較は稀であり、マクロ経済やグローバル経済史への貢献は少なかった。しかしそうした試みによってこそ、その一般性や特殊性がより明らかにされ、隣接分野への貢献も可能になると思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西陣・桐生・福井という近代日本有数の絹織物産地の発展メカニズムを技術と制度の革新という観点から、比較経済史的に分析・解明することにある。日本経済史研究において、伝統技術と西洋技術との融合は中心的な研究課題であり、個別の産地の研究はそれを解明する上で大変重要である。またそれは、グローバル経済史に対して重大な貢献をなす可能性が極めて高い。

そこで本研究では、西陣から桐生や福井、桐生から福井への技術や知識の流れに着目し、それらによって引き起こされた組織・制度の革新の類似性・相違点について三者を比較考察する。ここで得られた知見を、日本経済史・グローバル経済史研究だけでなく開発経済学における途上国の産業集積研究とも融合させることで、比較産地発展史の構築を目指す。

3. 研究の方法

技術や制度の革新という観点から、西陣・桐生・福井産地の発展メカニズムの類似性・相違点を比較経済史的に分析・解明するために、まずは、各産地の基本的な数量的・記述的資料を収集し、三者が比較可能なデータベースの構築につとめる。このデータをもとに、西陣・桐生・福井の発展の特徴を把握した上で、織物業全体における三者の位置づけとその変化を明確にする。

さらに西陣から桐生・福井、桐生から福井へと普及・定着した技術・知識の実態とその流れに着目しつつ、各産地の性格を特徴づける製品、指向する市場、生産組織、産地内の制度・組織、教育・技術普及機関にかかわるインタビュー調査・資料整理につとめる。そして、上記の特徴が、いかなる要因にもとづき生成されてきたのかを比較検討し、三者の発展のメカニズムの類似点・相違点を実証的に明らかにする。これらの分析から得られた結果を現在の途上国の産業集積、ヨーロッパにおける歴史的な産地と比較・検討する。

4. 研究成果

本研究は、日本経済史の分野における「比較産地発展史」の構築を目指し、西陣・桐生・福井という産地の発展を個々に詳細に分析するのみならず、新技術の導入と制度革新という観点から、産地の共通点や相違点を明らかにした。すなわち、研究期間全体を通して、西陣・桐生・福井のそれぞれの発展の特質と

関連性を考察した。その成果の一つは、*Journal of the Japanese and International Economies* といった査読付き国際英文雑誌に掲載された。これは、個々の事例研究の蓄積が進む産地研究に、比較史という新たな研究の可能性や方向性を示すものとなる。なぜならば、日本の経済発展過程で重要な意味を持った個々の織物産地に関する分析が深められる一方で、それらを統合するような分析はほとんど試みられなかったからである。同時に、グローバル経済史研究に対しては、日本のキャッチアップ・プロセスや国際競争力の形成をより実証的なレベルで明らかにすることに貢献したと思われる。

個々の産地に関する成果としては、福井の歴史的発展について、The 4th Asian Historical Economics Conference で報告し、現在、英文学術雑誌に投稿準備中である。同時に、現在の福井で代表的先端企業であるセーレン株式会社の社史編纂にも携わり、産地の発展をミクロレベルで長期的に考察した。桐生については、産地の成長要因を技術や組織・制度の観点から分析し、その成果は *Economic History Review* や *Business History Review* などの査読付き雑誌に掲載された。西陣に関しては、「産地京都」という新しい概念を用いて、他の伝統産業や近代産業が混在する産業集積の歴史的研究の意義を提起する機会を得た。加えて、Luxury industry の一つともいえる西陣機業の戦後の動向や新しい挑戦についても、長期的な視点から検討した。

さらに本研究は、産業集積研究が活発な開発経済学分野と日本経済史研究との融合を試みた。研究代表者が専門とする経済史は、経済発展の過程における普遍的なメカニズムを解明しようとする点で開発経済学と親和的であるが、両者はディシプリンを同じくしつつも、分析期間と分析手法の相違から相互の対話が進んでこなかった。平成 28 年の Economic History Association の年次大会のテーマが“Economic History and Economic Development”であることからもうかがえるように、両分野の対話がようやく国際的なテーマとなってきた。研究代表者はそれにさきがけ、両学問分野を架橋する試みとして、第 17 回国際経済史会議（平成 27 年、於・京都市）でパネル“Visiting Industrial Districts in History and Developing World”を組織し、歴史的に見た日本とヨーロッパ、現在成長しているアジア・アフリカにおける産業集積を同じプラットフォームの上で比較することの有効性を提起した。このことは開発経済学の分析に広い歴史的視野を与え、歴史研究の重要性の再認識につながり、日本の歴史的経験をグローバル経済史に位置付けるという意味でも、画期的だったと思われる。

そこでの問題提起にもとづき、研究代表者は技術導入の重要性・同業組合の機能・地方政府の役割の観点から、上記の産地・産業集積の発展を分析した諸論稿による Hashino

and Otsuka (forthcoming, 2016) *Industrial Districts in History and the Developing World*, Springer を共同編集した。ここでは、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、日本の歴史的ならびに現代の産地・産業集積において、共通した制度や仕組みが重要であったことが示された。より具体的には、新技術の導入を支えた同業者組織の機能、ならびに地方政府のサポートという制度が、マーシャル流の集積の外部経済を超えて、産地・産業集積の発展に普遍的に重要であったことが明らかにされた。発展途上国が先進国から技術導入をする際、さまざまな障害や存在し、その克服が問題となる。それに対し、途上国日本の在来産業・産地における技術・制度の革新や人材育成の重要性を考察する本研究の成果は、現代の途上国が直面する問題に直接的な示唆を与えらるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

【査読付】

1. 橋野知子・高槻泰郎・山本千映「産地京都の 300 年：明治維新から 22 世紀まで」、『経営史学』第 55 巻第 1 号(2016、近刊)。
2. 橋野知子「名門企業の形成と『発展』 - 福井県精練加工からセーレンへ」、『企業家研究』第 13 号(2016、近刊)。
3. Hashino, Tomoko and Otsuka, Keijiro. “Hand Looms, Power Looms, and Changing Production Organizations: The Case of the Kiryu Weaving District in Early Twentieth-Century Japan,” *Economic History Review* 66(3), 2013, pp. 785-804. DOI: 10.1111/j.1468-0289.2012.00680.x
4. Hashino, Tomoko and Kurosawa, Takafumi. “Beyond Marshallian Agglomeration Economies: The Roles of the Local Trade Association in a Meiji Japan Weaving District (1868-1912),” *Business History Review*, 2013, 87(3), 2013, pp. 489-513. DOI: <http://dx.doi.org/10.1017/S0007680513000731>
5. Hashino, Tomoko and Otsuka, Keijiro. “Cluster-based Industrial Development in Contemporary Developing Countries and Modern Japanese Economic History,” *Journal of the Japanese and International Economies* 30, 2013, pp. 19-32. doi:10.1016/j.jjie.2013.09.001

【査読無】

1. 橋野知子・大塚啓二郎「産地・産業集積

- の発展 - 経済史と開発経済学の融合」、『国民経済雑誌』第 214 巻第 2 号(2016、近刊)。
2. Hashino, Tomoko and Otsuka, Keijiro. “The Rise and Fall of Industrialization and Changing Labor Intensity: The Case of Export-Oriented Silk Weaving District in Modern Japan,” Discussion Paper No. 1501, 2015, Graduate School of Economics, Kobe University.
 3. Hashino, Tomoko. “Luxury Market and Survival: Japan’s Traditional Kimono Weaving Industry after the 1950s,” Discussion Paper No.1507, Graduate School of Economics, Kobe University, 2015.
 4. 橋野知子「桐生織物業の近代化 - 新技術の導入をめぐる」、『桐生史苑』第 54 巻、2015 年、3-14 頁。
 5. Hashino, Tomoko and Otsuka, Keijiro. “Expansion and Transformation of the Export-Oriented Silk Weaving District: The Case of Fukui in Japan from 1890 to 1919,” Discussion Paper No. 1303, 2013, Graduate School of Economics, Kobe University.
 6. 橋野知子「近代福井における精練業の発展と織物業 - 産地・市場・政府」、『国民経済雑誌』207(1)、2013 年、81-92 頁。
- 〔学会発表〕(計 6 件)
1. 橋野知子「問題提起 - 歴史的視点から見た産地京都の今日的意味」、『第 17 回国際経済史会議公開講座「産地京都の 300 年」』2015.8.4、同志社大学(京都府)。
 2. 橋野知子「名門企業の形成と『発展』」、『企業家研究フォーラム』2015.7.19、大阪大学・中の島センター(大阪府)。
 3. Hashino, Tomoko. “The Rise and Fall of Industrialization and Changing Labor Intensity: The Case of an Export-Oriented Silk Weaving District in Modern Japan” at the Fourth Asian Historical Economics Conference, Bogazici University, Istanbul, September 20, 2014 (with Keijiro Otsuka).
 4. Hashino, Tomoko. “Luxury market and survival: Japan’s traditional kimono weaving industry after 1950s” at the 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center (Kyoto), August 7, 2015.

5. Hashino, Tomoko. “New technology and new marketing: the case of local trade association in weaving districts in Japan” at the 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center (Kyoto), August 4, 2015.
6. Hashino, Tomoko. “Technology transfer and different development paths of silk-weaving districts in modern Japan” at the 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center (Kyoto), August 4, 2015.

〔図書〕(計 3 件)

1. Hashino, Tomoko and Otsuka, Keijiro. eds. *Industrial Districts in History and the Developing World*, Springer (2016, forthcoming).
2. 橋野知子「繊維産業の成長とともに - 1889～1971 年」、『セーレン株式会社編・発行『セーレン経営史 - 希望の共有をめざして』』2015 年、25-66 頁。
3. 橋野知子「羽二重生産がもたらした希望 - 繊維王国福井の形成と発展」、『東大社研・玄田有二編『希望学・明日の向こうに』』、東京大学出版会、2014 年、145-156 頁。

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
橋野 知子 (HASHINO, Tomoko)
神戸大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：30305411

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：